

覚悟を決めた一瞬 ——中井川浩——

決起

ある目的のために、決意を固めて行動を起こすこと。

昭和十一年二月二十六日早朝五時、中井川浩は、日課である明治神宮への散歩に出かけようとしていた。昨晚からの雪のため、東京の街はすっかり雪景色に染まっていた。しかし、そんな美しい冬の朝は、突然の報せにより、消去されてしまうことになる。

警護の警官が中井川宅の玄関先に飛び込んできた。

クーデター

一般に武力による奇襲攻撃によって政権を奪取することをいう。

「中井川先生、大変です。陸軍が決起しました。クーデターです。」

日本近代史に残る、有名な二・二六事件が突然始まったのである。

二・二六事件

一九三六年（昭和十一年）二月二六日から二月二九日にかけて、一部の陸軍青年将校らが下士官兵を率いて起こしたクーデター未遂事件。

中井川浩は、当時衆議院議員であり、時の文部大臣 川崎卓吉の秘書官を務めていた。彼は、このとき、文字通り命がけで川崎大臣を守り、宮中が一番乗りし、内閣書記官長にかわって緊急閣議を招集したのであった。

中井川浩は明治三十三年九月木崎村門部（現在の那珂市木崎）の農家に生まれる。

政治家として、また実業家として活躍し、地域の防災力向上・教育力の向上に努めた人であった。よく人に好かれる、不思議な



魅力をもった人物であったと、彼を知る多くの知人は口をそろえて言う。

衆議院議員を三期務めた彼は、国政・県政に尽力した。久慈川の改修治水工事推進や霞ヶ浦農科学校（現茨城大学農学部）の創立などは、その一つである。

二・二六事件における活躍は、そんな中井川浩の人柄を表す象徴的なエピソードと言える。

陸軍決起の報せを受けた浩は、いち早く自らが秘書官を務める川崎大臣の屋敷へと車を飛ばした。はたして、川崎大臣は無事であった。大臣は、浩の顔を見るなりこう言った。

「私はすぐに参内（参内）（天皇に面会すること）して、緊急閣議の開催をお願いしなければならない。中井川君、一緒に来て欲しい。」

川崎大臣は、いつになく真剣な面持ちで浩を見た。皇居の周りは、当然決起した兵隊たちで囲まれている。川崎大臣も兵隊たちの襲撃の対象になっているかもしれない。そうなれば、皇居に向かうのは命がけである。一瞬、浩は川崎大臣の顔をまじまじと見つめ直した。

「わかりました。すぐに支度をしてください。」

浩は穏やかな声でそう言うと、大臣に向かってうっすらと微笑んで見せた。

大臣が参内の支度をする間、浩は再び近所を駆けまわり、記者時代に身に付けた取材の能力を発揮し、情報の収集を行った。いくつかの貴重な情報が得られた。

「乾門の辺りが、一番見張りの兵隊が少ないようです。車をそちらに向けましょう。もし、兵隊に止められた時は、私が車を降りて応対します。決して大臣は車を降りてはなりません。」

浩はゆっくりとかみしめるように大臣に向かってそう言った。そして、今度は運転手に向かい、「万一私が撃たれた場合は、その隙に大臣を宮中に運び込め。いいな。」

一転して厳しい口調でびしゃりと言うと、それきり前を見て黙り込んでしまった。

乾門が近づいてくると、腰に剣を指した兵隊たちが目につくようになった。緊張感が一気に高まる。竹橋を過ぎ、

閣議

内閣総理大臣が主催し、内閣の職務遂行に関し、意志を決定する会議。

乾門

天皇の住まいである皇居の、北西に位置する門。



英国大使館前にさしかかったとき、数人の兵士に停止を命ぜられた。浩はゆっくり車を降りると、堂々と、目的を告げた。兵士は黙って見返したまま道を譲ろうとしない。すると浩は大きく一つ息を吸い込むと、

「閣僚の参内をなぜ阻止するの か！」

と、大きな声で兵士を一喝した。兵士は驚いた様子で、それぞれに道を開けた。その後も同じような押し問答が何度か繰り返された。浩は、車には戻らずに、歩いて車の先導をして、皇居の乾門まで進んでいった。車で僅か五分の道のりを三十分もかけてようやく門に到着し、無事皇居に入ることができた。

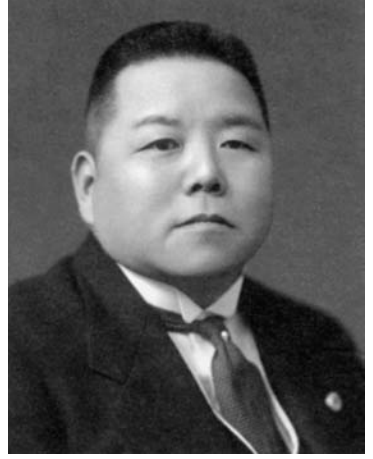
その三十分後、緊急閣議は招集されたのであった。

中井川浩をよく知るといふ同僚議員が、後に彼を評してこう語っている。

「中井川君という人は誠に不思議な存在であった。正規な学問もしないが、それでいて極めて常識があり、口数は多くないがすぐに問題の核心を把握し、同志の信頼はもちろんだが反対派からすらも尊敬された。非常時日本の中で、実に偉大な働きをなした、近来珍しき人物である。」

中井川浩が、二・二六事件という大事件に遭遇しても、冷静に行動できたのはなぜなのか。また、人生の節目の大きな決断を迫られたときにも、その都度、まわりの者を驚かせるような大胆な選択をできたのはなぜなのか。どのような思いで人生の分かれ道を迎え、行動を選択し、激動の時代を生き抜いたのか。

中井川浩本人は、政財界を引退した後も、あまり多くを語らなかつたという。



「那珂市ゆかりの先人たち」より

中井川 浩

明治三十三年九月木崎村門部（現在の那珂市木崎）の農家に生まれる。

水戸の新聞社勤務の後、自ら独立して新聞社を創立。昭和二年、土浦町議会議員当選後、昭和六年、茨城県議会議員に当選。昭和七年、衆議院議員に出馬し当選。衆議院議員を三期務め、国政・県政に尽力する。

久慈川の改修治水工事推進・霞ヶ浦農科学校（現茨城大学農学部）の創立など、防災・教育面で実績を残す。